

【特集】初期現象学における女性 ——情と社会という観点から——

植村 玄輝

本特集「初期現象学における女性——情と社会という観点から」は、主に20世紀前半に活動した三人の女性現象学者、エディット・シュタイン (Edith Stein, 1891-1942)、ゲルダ・ヴァルター (Gerda Walther, 1897-1977)、エルゼ・フォークトレンダー (Else Voigtländer, 1882-1946) を、感情・情動の哲学と社会哲学という切り口から取り上げるものである¹。近年再評価の進む、つまり裏を返せばそれまであまり顧みられることのなかった初期の現象学派、いわゆるミュンヘン・ゲッティンゲン学派に属するこの三人は、「情と社会」と大まかに括ることができる主題に関して、優れた論考を残している。このあたりについての詳しい話は八重樫、陶久、横山による各稿に譲るとして、以下では、本特集の背景についていくつかのことを述べておきたい²。哲学史研究にまつわるこの背景なしには、本特集の各論考が何をしたいのかがわかりにくくなるからだ。哲学史研究なんて興味ないよという人にも少しだけお付き合いいただきたい。

哲学史研究は、それが関わる時代・地域・潮流における大哲学者たち——たとえばプラト

¹ 三人の名前を、ここでは知名度の順に挙げた。各論考の並びは、それぞれが扱う現象学者の生年順である。なおヴァルターは20世紀後半まで著述活動を行っているが、その大半を占めるのは超心理学 (parapsychology) についての論文であり、それらは本特集の横山論考では扱われていない。

² こうしたトピックに関連する先行研究を、ここでもいくつか挙げておこう (より詳しくは、それぞれの論考の参考文献を参照のこと)。初期現象学全般と現象学の歴史におけるその位置づけについては、いまや古典的研究といってよい Spiegelberg 1982 を避けて通ることはもちろんできない。スピーゲルバーグの論述を必要に応じて修正しつつさらに大きな描像を提出することが、現在の初期現象学にとっての最大の課題のひとつだろう。より近年の研究を踏まえた総説としては、Salice 2019 がある。初期現象学における感情・情動の哲学については、包括的なモノグラフである Vendrell-Ferran 2008a のほか、Szanto & Landweer 2020 の第一部が概観を与えてくれる。初期現象学における社会哲学——現象学的社会学の背景のひとつ——については、Mulligan 2000 による簡潔で要を得た概説からはじめ、Salice & Schmid 2016 に含まれたいくつかの論考や Loidolt 2010 の第II部にあたることで、その輪郭を捉えることができるはずだ。またかなり大雑把なスケッチではあるが、植村 2017 も参考にされたい。哲学史における女性という主題については、近年 (英語圏を中心に) 研究が急速な勢いで広がっている。ここでは、古代から現代 (といっても、単独で項目が立てられているのは1909年生まれのスモーヌ・ヴェイユまで) を扱った4巻本 Weithe 1995 と、Witt & Shapiro 2015 によるフェミニスト哲学史という観点からの概略、そして、この主題に関する研究叢書 *Women in the History of Philosophy and Sciences* (Springer) を挙げておく。なお、この研究叢書の責任編集者のひとりである Ruth Hagengruber はドイツのバーダボン大学の「女性哲学者と女性科学者の歴史 (History of Women Philosophers and Scientists)」研究センターの所長であり、同センターのウェブページにはさまざまな関連情報が掲載されている (<http://historyofwomenphilosophers.org/>)。この研究センターの目的と活動については、上述のウェブサイトのほか、村上 2020 にも簡単な紹介がある。初期現象学における女性現象学者に関する研究は、同センターが現在取り組むプロジェクトのひとつでもあり、先述した研究叢書からも、ヴァルターに関する論集 (Calcagno 2018) のほか、女性現象学者と社会存在論に関する論集 (Luft & Hagengruber 2018) がこれまで出版されている。また、この叢書からはフォークトレンダーに関する論集の出版も予定されている。最後に、本特集が扱うシュタイン、ヴァルター、フォークトレンダーの哲学について「情と社会」という観点から概略を与えつつ、女性であったためにゆえに三人が大学でのキャリアを築くことができなかった事情についても考察した研究として、Vendrell-Ferran 2008b がある。

ンやアリストテレス、カントやヘーゲル、フッサールやハイデガーやメルロ＝ポンティやレヴィナス——の著作を丹念に読み、それぞれの思想やそれらが織りなす布置を明らかにすることを目指す傾向にある。たとえば、フッサールは後期の著作や草稿で何に取り組んだのか、『存在と時間』のハイデガーは何を主張したのか、そしてそれらを付き合わせることで何が見えてくるのか、という具合に。

哲学史研究のなかで主役として扱われ、それを読むことが哲学史教育のカリキュラムの重要な一部とみなされる古典的著作、つまりカノン（正典）がまさにカノンとしての地位を占めていることには、たしかにもっともな理由があることも多いはずだ。個別の事情を無視して単純化してしまえば、ひとつには、こういう説明ができるだろう。これらの著作は総じて何らかの際立った哲学的意義を備えており、それらを読み解くことが他の手段では得難い何らかの知見をもたらしてくれる、だからこそそれらは哲学史の金字塔としていまでも残っているのだ、と。

「勝利者史観」と言いたくもなるこうした見解そのものも検討に付す必要があるかもしれないが、いま問題にしたいのはそれとは別の事柄である。現行のカノンがカノンであることにもっともな理由があるにせよ、いま私たちが手にしているカノンのリストが完全であるということは、ありそうにない。私たちは、着目すべき過去の哲学者たちとその著作を忘却してしまっているのではないだろうか。その忘却によって、重要な何かが捉え損ねられているのではないだろうか。ある時代における哲学のあり方をより包括的に理解したいならば、忘れ去られてしまった哲学者たちを含めてその全体像を描くことを目指すべきではないだろうか³。

こうした状況にあって、近年の哲学史研究では、カノンの見直しという作業がさまざまなかたちで着手されている⁴。ひとことで言えば、それは、過去のある時代（と地域）の哲学をすでに定まったカノンを中心にして捉えることで周縁化されてしまった哲学者や哲学的著作を忘却から救い出し、それらに研究に値する対象としての地位を与える試みである。既存のカノンだけでなくそこからこぼれ落ちたテキストを通じて過去を再構成することによって、私たちはその時代の哲学により十全なしかたで接近し、それをよりフェアに評価することを期待できるのである。

ただしすぐさま付け加えなければならないのは、ここでの「中心」と「周縁」の内実は、哲学史研究の対象となる時代と地域によって異なりうるということだ。そのため、カノンの見直しという作業がどのような属性を持った人物とその著作に着目するのも、場合によって異なりうる。たとえば、18世紀末から19世紀前半にかけてのドイツ古典哲学の研究の場合、これまでその中心に据えられてきたのは、あくまでも、同時代に大きな評価と注目を得た大学教授たち、具体的に名前を挙げるならばカント、フィヒテ、シェリング、ヘーゲル

³ またここで、現在私たちが手にしているカノンのリストにはそれにふさわしくない著作も含まれているのではないかと問うこともできるかもしれない。しかし、今はこの問題にはこれ以上立ち入らない。

⁴ こうした動きのなかで出版された論集として、たとえば Schliesser 2016 がある。

だといっていいだろう。こうした状況にあつては、カノンの見直しは、相対的に無名の哲学教授の著作や、さらには大学の外で活動した（あるいは活動することを余儀なくされた）哲学者たち——この文脈では、たとえばポーランド出身のラビであり大学教育さえ受けていなかったザロモン・マイモン——の著作の検討へと導かれていくことになるはずだ⁵。それに対して19世紀後半のドイツ哲学史研究では、大学教授たちはむしろ周縁的な存在として扱われてきた。この時代と地域における哲学の主角格として持ち出される人物がまずもってショーペンハウアーやニーチェやマルクスといった人たちだったということ思い出そう。このとき、「忘却から救い出されるべきテキスト」のなかには、あまり有名でない大学教授たちのものが大量に含まれることが見込まれる（ちなみにここでの「大量」は著作の数だけでなくそのそれぞれのサイズも意味する。この時期のドイツの大学の先生たちはぶ厚い本をよく出していた）⁶。こうした方向性でのカノンの見直しは、見方によっては反動的または後退的な骨董趣味に映ることもあるかもしれない。ここで取り上げられるあまり有名でない大学教授たちは、社会的地位や暮らし向きに関していえば、同時代の主角級の哲学者たちよりも総じて恵まれていたと推定できる。すると、少なくとも部分的には、そしていささかあしざまな言い方をすれば、目下の文脈におけるカノンの見直しの試みは、時が経つうちに淘汰されてしまう程度の成果しか挙げられなかったくせに制度の内部に入り込んでいたおかげで権益だけはしっかりせしめたと思われ三下の無駄に長ったらしいパツとしない仕事をわざわざ後になって図書館（あるいは Internet Archives や Google Books）から持ち出して持ち上げることでありうるからだ。しかしこうした捉え方に対しては、カノンの見直しの目的が過去の哲学のより包括的な全体像を得ることにあるという点をもういちど強調しておきたい。ある時代の哲学を、これまでの研究がとりこぼしてきた著作とその著者たちも含めて理解したいならば、そうした著作や著者たちが別の観点では（それほど）評価できないのだとしても、私たちはそのことをさしあたり受け止めなければならない⁷。

中心と周縁という対比に関して注意しておかなければいけないことはまだある。哲学史におけるカノンの見直しによってあらたに光を当てられる周縁的な著作やその著者は、別

⁵ ドイツ古典哲学に関するこうした路線の研究として、たとえば Beiser 1993 が挙げられる。同書でデビューを飾ったバイザーはその後、ドイツ哲学史研究におけるカノンの見直しという（英語圏での）動向を代表する研究者となる。既存のカノンだけに基づく哲学史研究に対するバイザーの批判的な態度は、たとえば、19世紀哲学史に関するある論集の書評（Beiser 2011）での同書の編集方針に対する辛辣な批判によくあらわれている。

⁶ こうした観点に意識的に立つことでなされた19世紀後半の哲学史研究としてまず挙げることができるのは、やはりバイザーによる小著（Beiser 2014）だろう。

⁷ 20世紀前半のドイツ語圏における現象学の研究に関して、こうしたかたちで私たちの頭をとりわけ悩ませることになるのは、そこで取り上げられる哲学者たちのナチス関与（疑惑）だろう。この問題はハイデガーのような大物だけに関わるものではない。本特集で取り上げられる哲学者たちのうちでも、フォークトレンダーがナチス党员であったことが確認されている（八重樫論考の注2を参照）。また、少し話はずれるが、本特集のように哲学史における女性にフォーカスすると、これまで高く評価されてきた男性哲学者たちの女性差別的・女性蔑視的な言動を直視することを迫られることになる（たとえば横山論考で第1節で取り上げられる、フッサールのヴァルターに対する態度など）。それをふまえて過去の哲学について私たちがいかにして語るべきかということは、今後の哲学史研究・教育にとって重要な問題のひとつだろう。

の文脈ではすでに中心的な地位が与えられているということもありうる。例えば尾高朝雄に関する研究は、英語を共通言語とした哲学史研究という文脈では、周縁に追いやられた哲学者たちを救い出すものとして理解されうる⁸。また、日本における現象学研究という文脈でも、尾高の研究は同様の試みになりうるかもしれない。しかしこうした文脈を離れ、日本の法哲学・法思想というまた別の文脈のなかでは、尾高は東京（帝国）大学法学部における法哲学の伝統に属する「権威中の権威」だ、と述べても大袈裟ではないはずだ⁹。

周縁に追いやられたテキストの「名誉回復」のやり方についても、見解がひとつに定まるとは限らない。それらのテキストを既存のカノンに付け加えるのか、それとも、カノンという考え方そのものを拒否するかたちでそれらを研究すべきなのかについて、議論の余地が残されている。

本特集は、いま述べたような点にも留意したうえで、これまでの現象学史研究において周縁に留まり続けてきたシュタイン、ヴァルター、フォークトレンダーに着目する。本特集を構成する三篇の論考が、現象学のカノンの見直しへの注目を呼ぶきっかけになり、またこのカノンの見直しという仕事に貢献することになるならば、企画責任者である植村および各論文の著者にとってこれ以上の喜びはない。

最後に、本特集と「フェミニスト哲学史」と呼ばれる研究との関係について一言述べておきたい¹⁰。多様でありうるし、また実際に多様であるカノンの見直しという作業のひとつに位置づけることもできるこの動向は、その多くに共通する目的のひとつとして、これまでの哲学史研究のなかで周縁化されてきた女性哲学者とその著作に光をあてることで、男性的なものという哲学の自己イメージを払拭することを目指す（いうまでもなく、この目的をどうやって実現するのかに応じて、フェミニスト哲学史の内部にも多様な方向性がある）。三人の女性現象学者の著作を掘り起こし検討する本特集の論考は、それ自体としてはフェミニスト哲学史研究の成果であるわけではないが、こうした研究の基礎として位置づけることもできる。哲学史研究が最終的に何を目指すにしても、過去の哲学者たちの著作を掘り起こし整理する学説誌的（doxographic）な作業がその前提として必要となるが、以下の論考にはまさにそうした学説誌的な作業を含むからだ。だが、先に述べたようなフェミニズム哲学史の目的に対して本特集がいかなる寄与をどれくらい行いうるのかという点については、おそらくより慎重な議論が必要である。というのも、過去に優れた女性哲学者がいたことの指摘そのものは、そこでの「優秀さ」の捉え方によっては、問題となっている哲学のイメージに揺さぶりをかけるどころか、それを強化することにもなりかねないからだ。こうした一連の問題と地続きであることも踏まえつつ、まずはより包括的な哲学史研究のために読ま

⁸ こうした研究として、Uemura & Yaegashi 2016, Yaegashi & Uemura 2019, Uemura forthcoming が挙げられる。

⁹ 同様のことは、本特集で取り上げられるシュタインについても成り立つかもしれない——シュタインは1998年にヨハネ・パウロ二世によって列聖された、カソリックの聖人でもある。本特集の陶久論考では、シュタインとカソリックの関係をどう見積もるかという話題も論じられる。

¹⁰ フェミニスト哲学史については、Stanford Encyclopedia of Philosophy の項目（Witt & Shapiro 2015）が現状をわかりやすく整理している。本段落の記述もこの項目に多くを負う。

れるべきテキストとその声を忘却から救い出すこと、このことを本特集は目指している。

文献

- Beiser, F. C., 1993, *The Fate of Reason. German Philosophy from Kant to Fichte*, Harvard University Press.
- Beiser, F. C., 2011, “Alan D. Schrift and Daniel Conway (eds.), *Nineteenth Century Philosophy: Revolutionary Responses to the Existing Order* [Book Review]” *Notre Dame Philosophical Review*, 2011.08.32. URL = <<https://ndpr.nd.edu/news/nineteenth-century-philosophy-revolutionary-responses-to-the-existing-order/>>
- Beiser, F. C., 2014, *After Hegel. German Philosophy 1840–1900*, Princeton University Press.
- Calcagno, A. (ed.), 2018, *Gerda Walther’s Phenomenology of Sociality, Psychology, and Religion*, Springer.
- Loidolt, S., 2010, *Einführung in die Rechtsphänomenologie. Eine historisch-systematische Darstellung*, Mohr Siebeck.
- Luft, S. & Hagenhuber, R., 2018, *Women Phenomenologists on Social Ontology. We-Experiences, Communal Life, and Joint Action*, Springer.
- Mulligan, K., 2001, “Phenomenology: Philosophical Aspects.” In Smelser, N. J. & Baltes, P. B. (eds.), *International Encyclopedia of the Social and Behavioral Sciences*, Pergamon, 11363–11369.
- Salice, A., 2019, “The Phenomenology of the Munich and Göttingen Circles.” *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Winter 2019 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/win2019/entries/phenomenology-mg/>>.
- Salice, A. & Schmid, H. B., 2016, *The Phenomenological Approach to Social Reality. History, Concepts, Problems*, Springer.
- Schliesser, E. (ed.), 2016, *Ten Neglected Classics of Philosophy*, Oxford University Press.
- Spiegelberg, H., 1982, *The Phenomenological Movement*, 3rd edition, Nijhoff. (立松弘孝監訳、2000、『現象学運動』、上下巻、世界書院) .
- Szanto, T. & Landweer, H., 2020, *The Routledge Handbook of Phenomenology of Emotion*, Routledge.
- Uemura, G., Forthcoming, “Not Idealist Enough. Satomi Takahashi and Tomoo Otaka on Husserl’s Idealism” Forthcoming in *The Idealism-Realism Debate in the Early Phenomenological Movement*, Springer.
- Uemura, G. & Yaegashi, T., 2016, “The Actuality of States and Other Social Groups. Tomoo Otaka’s Transcendental Project?” In Salice & Schmid 2016, 349–359.
- Vendrell-Ferran, Í., 2008a, *Die Emotionen: Gefühle in der realistischen Phänomenologie*, Akademie Verlag.
- Vendrell-Ferran, Í., 2008b, “Emotionen und Sozialität in der frühen Phänomenologie. Über die Möglichkeiten von Frauen in der ersten Phase wissenschaftlicher Schulbildung” *Feminist Studien* 1/08, 48–64.
- Witt, C. & Shapiro, L., 2018, “Feminist History of Philosophy”, *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* (Fall 2018 Edition), Edward N. Zalta (ed.), URL = <<https://plato.stanford.edu/archives/fall2018/entries/feminism-femhist/>>.
- Yaegashi, T. & Uemura, G., 2019, “Otaka Tomoo’s Conception of Sovereignty as Nomos: A Phenomenological Interpretation.” In *Tetsugaku Companion to Phenomenology and Japanese Philosophy*, pp.131-145.

植村玄輝、2017、「社会の現象学」、植村玄輝・八重樫徹・吉川孝編著、富山豊・森功次著、『ワードマップ 現代現象学——経験からはじめる哲学入門』、新曜社、258-261.

村上祐子、2020、「男女共同参画・若手研究者支援ワークショップ『取組への考え方とグッドプラクティス』報告」、『哲學』第71号、日本哲学会編、109-113.

(うえむらげんき・岡山大学)